

矢板市 生涯学習推進計画(案)

6期計画

2026-2030

「わくわく学ぶ、つながる、ともにつくる」



矢板市生涯学習推進本部

目 次

第 1 章 計画の策定について	-----	1
1 趣旨		
2 推進期間		
3 計画の位置付け		
4 基本理念と目標		
5 施策の体系		
6 学びの土台づくりの施策目標		
7 6期計画の見方		
第 2 章 学びの土台をつくる	-----	5
楽しむ		
尊重		
学び続ける		
情報		
環境整備		
サポート体制		
ネットワークづくり		
第 3 章 主体的に学ぶ	-----	9
得意・好き・興味		
自分ゴトに		
選べる余地		
成果の実感		
第 4 章 協働的に学ぶ	-----	11
対話の場		
問い合わせの共有		
役割、得意を活かす		
プロセスを重視		
第 5 章 地域とつながる	-----	13
地域を学びのフィールドに		
多世代交流		
第 6 章 学びに人が集まる好循環をつくる	-----	15
事例紹介 1 親子で川の生きものさがし体験教室		
事例紹介 2 矢板市文化スポーツ複合施設		
事例紹介 3 矢板市生涯学習フェスティバル		
事例紹介 4 文化財を核としたコミュニティづくり		
事例紹介 5 けん玉をつかったプロモーション活動		
第 7 章 読書活動の推進	-----	21
思わず手にとってしまうしきけをつくる		
副次的な図書館の利用を促す		
読書活動推進の取組		
資料		
1 矢板市生涯学習推進本部設置要綱	-----	23
2 矢板市生涯学習推進計画策定員会設置要綱	-----	24
3 矢板市生涯学習推進計画策定委員名簿	-----	25

6期計画の策定にあたって



矢板市生涯学習推進本部長

矢板市長 森島 武芳

1 趣旨

生涯学習は、個人が人格を磨き、豊かな人生を送るために生涯にわたって学習することを理念としています。変化の激しい現代社会において、矢板市でも少子高齢化や人口減少に伴い、地域における学びの場の減少、つながりの希薄化といった課題が深刻化しています。

新しい「生涯学習推進計画」（6期計画）は、これまでの5期計画を踏まえて、この課題を乗り越え、市民一人ひとりが主体的に「学ぶこと」を通して出会い、支え合うまちを実現するための道しるべとして作成しました。

この計画は、「学びの土台」となる環境やサポート体制等を整え、

「主体的に学ぶ」「協働的に学ぶ」「地域とつながる」

という3つの柱を大切に、だれもが楽しみながら学びに取り組めるよう策定しました。

学校と地域をつなぐ支援活動、多世代で楽しめる体験や講座、市民が主役となるイベントなどを展開し、学びと交流の場を重ねていきます。

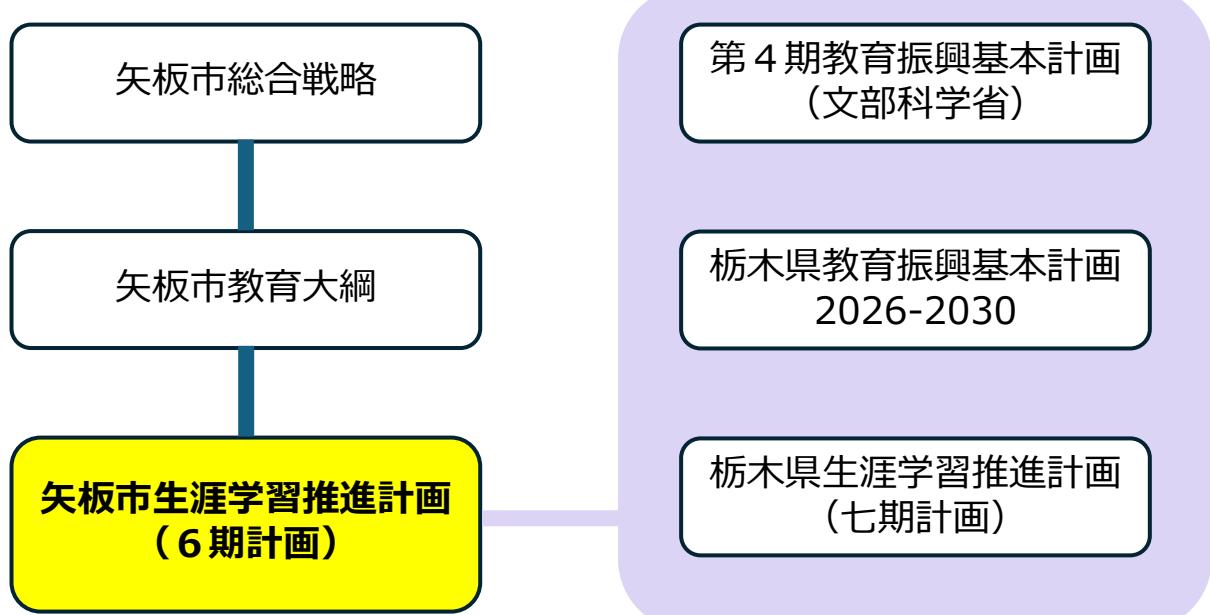
学びは特別なものではなく、日常の暮らしの中にある「楽しさ」や「喜び」です。その喜びをみんなで分かち合い、未来へつなげるまち——それが、矢板市がめざす姿です。

2 推進期間

令和8(2026)年度から令和12(2030)年度までの5年間とします。

ただし、今後の社会情勢の変化や施策の成果を評価し、必要に応じて見直しを行います。

3 計画の位置付け



4 基本理念と目標

「わくわく学ぶ、つながる、ともにつくる」

だれもが、自主的・主体的に楽しみながら学び、どの世代もライフステージに応じて協働的にアップデートしながら、つながりを広げ、よりよい未来をともに築いていく矢板市をめざします。

そのために、6期計画では、基本理念・目標を「わくわく学ぶ、つながる、ともにつくる」として、「学びの土台」とその上に建てる「3つの柱（主体的・協働的・地域とつながる）」を基本施策として実施することで生涯学習のさらなる推進に努めます。

主体的、協働的に学び、地域とつながることを循環していくように、「学びの土台」となる力の育成や環境整備に特に重点を置いて、生涯学習の更なる推進を図ります。

5 施策の体系



6 学びの土台づくりの施策目標

(1) 楽しむ

- ・講座や研修に「楽しむ」要素を盛り込み、参加者の満足度を高め、数値では測りにくい「意欲・協調・粘り強さ・自己理解・共感力」等の非認知能力の向上に資する。

推進指標	基準値（2024）	目標値（2030）
講座の振り返りアンケートで満足度を図り、満足と答えた市民の割合を増やす。	—	80%

(2) 学び続ける

- ・歴史等の専門家による研究だけでなく、世代を超えて市民が地域について学ぶ機会を増やし、郷土愛を醸成する。

推進指標	基準値（2024）	目標値（2030）
大人も子どもも地域について学んだり、発表したりできる機会を増やす。	6回	12回

(3) サポート体制・ネットワークづくり

- ・主体的、対話的に学校運営協議会を運営できるよう支援するとともに、地域の多様な主体との連携を図るために学校と地域をつなぐコーディネーターを配置する。

推進指標	基準値（2024）	目標値（2030）
市立小中学校すべてに、2人以上のコーディネーターを配置する。	0人	12人

(4) 尊重・ネットワークづくり

- ・専門的な知識や技能をもつ多様な主体と市民が共に活動できる機会の創出するとともに、市内イベント等に関わる市民団体や事業者を拡充する。

推進指標	基準値（2024）	目標値（2030）
多世代交流イベントの運営等に関わる団体数を増やす。	81団体	累計（同団体等は1と数える） 100団体

(5) 環境整備・ネットワークづくり

- ・市内事業所等と連携し、普段、本を手に取らない市民が思わず手にする環境を整備することを通して、市民みんなで本に親しむ場づくりにゆるやかに参画する。

推進指標	基準値（2024）	目標値（2030）
誰もがいつでも、どこでも本にふれることができる場所を増やす。	まちかどブック（仮称）への協力 —	まちかどブック（仮称）への協力 50か所

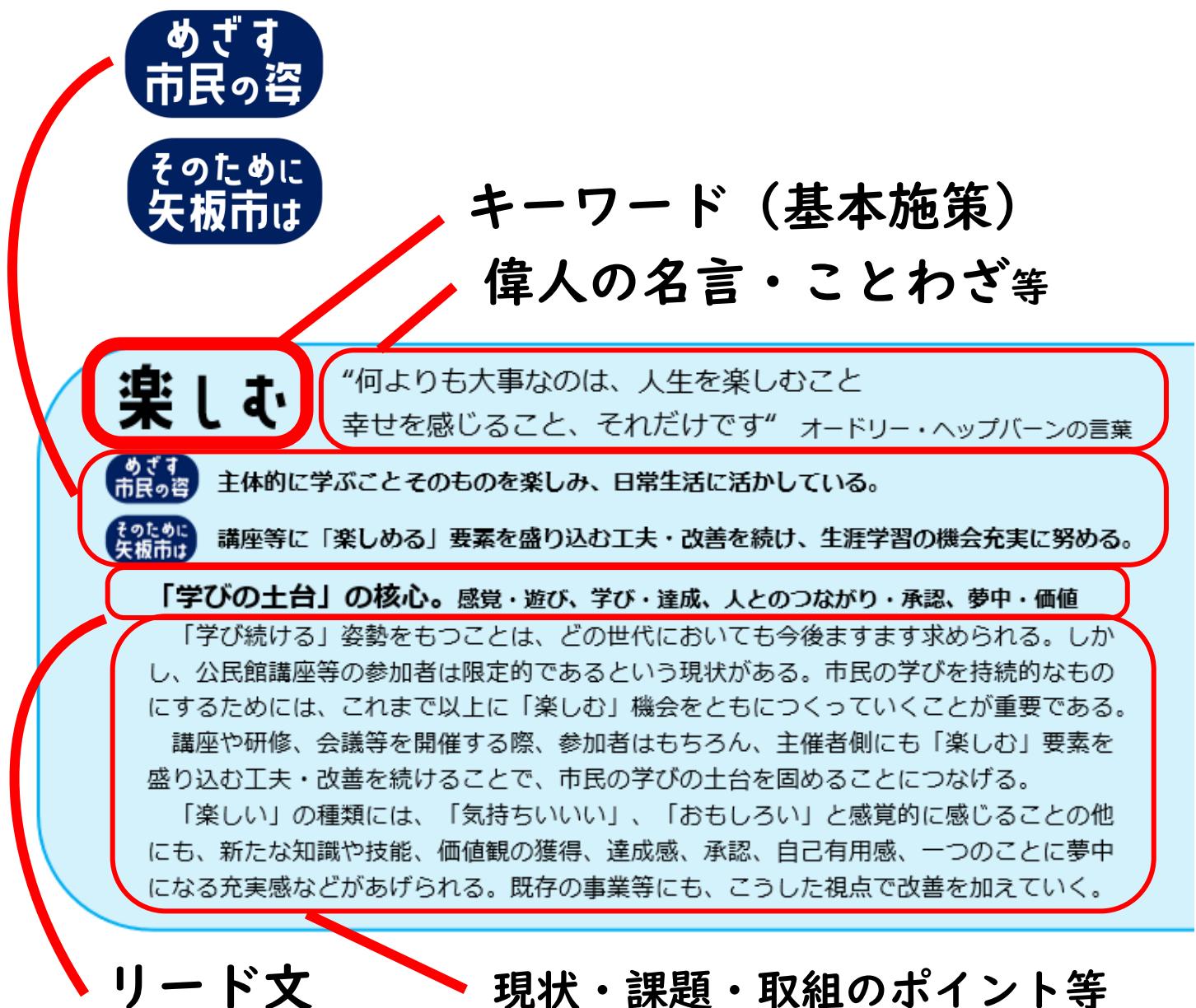
7 6期計画の見方

5ページからは、下記のような構成で記載してあります。

初めに、「キーワード（基本施策）」その右に、「偉人の名言・ことわざ」、その下に「めざす市民の姿」と「そのために矢板市は」どんな取組を行うかを示しました。

リード文、さらに現状と課題、本市としてどのような取組をしていくのか等について記載してあります。

行政職員はもちろん、学びの場づくりをするあらゆる市民にとって、わくわく学び、つながり、ともに課題を解決していくために必要なポイントを示しました。



変化の激しい現代社会において、どの世代においても「学び続ける」姿勢が重要であり、学習者が主体的に学びに向かえるよう、行政は適切な場づくりや情報提供、ネットワークの構築や環境整備等について、今一度見直す必要がある。

また、学習者が必要な情報を受け取ったり、楽しさを見出したり、課題を発見したりする力を高めるような手立てが必要である。

樂しむ

“何よりも大事なのは、人生を楽しむこと
幸せを感じること、それだけです” オードリー・ヘップバーンの言葉

主体的に学ぶことそのものを楽しみ、日常生活に活かしている。

講座等に「楽しめる」要素を盛り込む工夫・改善を続け、生涯学習の機会充実に努める。

「学びの土台」の核心 感覚・遊び、学び・達成、人とのつながり・承認、夢中・価値

「学び続ける」姿勢をもつことは、どの世代においても今後ますます求められる。しかし、公民館講座等の参加者は限定的であるという現状がある。市民の学びを持続的なものにするためには、これまで以上に「楽しむ」機会をともにつくっていくことが重要である。

講座や研修、会議等を開催する際、参加者はもちろん、主催者側にも「楽しむ」要素を盛り込む工夫・改善を続けることで、市民の学びの土台を固めることにつなげる。

「楽しい」の種類には、「気持ちいい」、「おもしろい」と感覚的に感じることの他にも、新たな知識や技能、価値観の獲得、達成感、承認、自己有用感、一つのことに夢中になる充実感などがあげられる。既存の事業等にも、こうした視点で改善を加えていく。

尊
重

“みんなちがってみんないい”

金子みすゞの詩『わたしと小鳥とすずと』

めざす
市民の姿 値値観や考え方の違いを受け止め、多様な学びを尊重している。

そのため
矢板市は 失敗しても「大丈夫」という安心感と「だれもが安心して参加できる場」づくりに努める。

「人を大切にする」 = 「学びを大切にする」

本市には、先人が築きあげた誇らしい様々な文化や慣習がある。一方、人口減少や構成の変化、現代の市民の実態と合わなくなってきたこと等により、これまで以上に年齢、性別、経験、障がい、国籍などの違いを受け入れる「学びの土台」の整備に努める必要がある。

「誰からも学べる」「それぞれが持っている知識や経験が違う」という前提に立ち、インクルーシブ教育や男女共同参画社会の啓発等、人権に配慮した直接的、間接的な学びの場をつくる。失敗しても責められることなく、何度も挑戦できる雰囲気や無理に発言を求めたりせず、お互いの「自分のペース」を大切にする姿勢で、生涯学習を推進していく。

※ 年齢、性別、国籍、障がいの有無などに関わらず
多様な人々を分け隔てなく受け入れ、尊重する考え方

学び続ける

めざす
市民の姿

ライフステージに応じて、必要な知識や技能を習得し、アップデートし続けている。

そのために
矢板市は

多様な内容、形態の学びの機会を充実させ、市民がより気軽に参加できるよう努める。

いくつになっても、学びは人生を豊かにする

大人になるにつれて、忙しさやモチベーションの低下で学びが続かなくなる傾向がある。市民が身近なテーマを選び、学び続けられるよう創意工夫し、取り組むよう努める。

子ども・青年期

成人期

高齢期

ライフステージに応じた学び

家庭教育 中心

- ・言葉や生活習慣の習得
- ・感性や探究心を育む

学校教育 中心

- ・基礎知識・技能の習得
- ・考える力・学びに向かう力を育む

社会教育・個人学習 中心

- ・家庭生活や社会参加に必要な知識やスキルの習得
- ・仕事に必要なスキルアップ
- ・リスキリングやキャリア形成
- ・趣味、文化活動の深化
- ・健康の増進
- ・社会とのつながり
- ・生きがいや充実感
- ・サロン活動

非認知能力を高める

おもな学びの例

ことばの学び

自然あそびなどを通した感性や探究心

協調性・郷土愛の醸成

考える力・学びに向かう力

地域体験（農業・防災・環境など）

ボランティア活動などによる社会性

文化・スポーツ活動

キャリア教育（職場体験・進路学習）

ICT活用スキルの習得

専門的知識・技能の習得

留学や国際交流による異文化理解

キャリア形成学習

職業スキルアップ（資格取得・リスキリング）

子育て支援・家庭教育学習

セカンドキャリアに向けた学習

地域活動・自治会活動への参画学習

健康維持・介護予防など

多世代交流を通した学び

学校教育

生涯学習

家庭教育

社会教育

個人学習

- ・国・自治体・公民館等が行う講座・研修会
- ・大学・高校等が行う公開講座・企業内教育
- ・民間教育事業者が行うスクール等

- ・スポーツ活動・文化活動・ボランティア活動・レクリエーション活動等における学習

情報

“情報力とは、情報を入手する力ではなく、情報を解釈して利用する力である” ピーター・ドラッカーの言葉

めざす
市民の姿

必要な情報を自らつかみ取り、学びに向かい、意見や感想を伝えている。

そのため
矢板市は

「目的×相手目線×わかりやすさ×魅力」を意識した効果的な発信に努める。

情報は「届ける人」と「受け取る人」がいて、はじめて活きる

生涯学習を推進する上で、どのような講座や研修会等が行われているのかを市民に対して効果的に発信する必要がある。どのような目的で、誰に向けて、どのように伝えるのかを明確にして、分かりやすく、シンプルに魅力を伝えられるよう努める。

目的や対象者に合わせ、広報やいた、新聞、雑誌、チラシ等の従来の方法に加えて、ホームページやSNSといった多様な方法を効果的に使い、魅力やストーリーを伝える。

また、募集時だけでなく、結果や効果の共有などを継続的に周知し、適切なタイミングで発信することで、次への期待を高めるよう努める。

一方、情報機器の正しい操作方法を学ぶ機会の充実を図るなどして、市民が主体的に情報をつかみ取る姿勢やその力を伸ばすための取組を行う。

環境整備

“孟母三遷の教え” ことわざ

(教育において環境の影響が大きく、良い環境を求め努力せよ)

めざす
市民の姿

今ある環境を活かして主体的に学び、必要な環境を自ら求め行動している。

そのため
矢板市は

施設や設備の整備を進めるとともに、自ら環境を変えようとする人づくりに努める。

環境が変われば心が変わる 心が変われば行動が変わる

市内の社会教育施設や設備の多くは、老朽化が進み、計画的な補修や修繕を必要としている現状がある。また、これらの利用者は一部の市民に限られているという側面もある。

一方、2024年に矢板市文化スポーツ複合施設が開業し、多様な主体が集まる拠点として、「交流の場」「成果の発表の場」ともなっている。



公民館や図書館、学校、郷土資料館等の既存の施設でも、学ぶだけでなく、ちょっと立ち寄れる「居場所」としての機能の充実に努める。Wi-Fi環境を整えたり、落ち着いて自習したり、対話したりできる「開かれた雰囲気」をつくり、これまで以上に世代を超えて活用できる環境を整え、市民の主体的な学びを促していく。

文化財等の保存、管理に努め、市民の学びに有効活用していく。

サポート体制

▲既存団体の高齢化 ▲新たな人が入りにくい ▲負担大で続かない
→学びを支える「これからの人づくり」を

めざす
市民の姿

多様な市民が小さな関わりから、文化やスポーツの振興、地域活動に参加している。

そのため
矢板市は

これまでの仕組みや役割をそのまま引き継ぐのではなく、新たなカタチを模索する。

ゆるやかに参加し、学びを支えるこれからの人づくり

既存団体の高齢化や新たな担い手不足により、地域コミュニティにおける様々な継承が困難な現状がある。限られた人への役割を少しずつ「縮小・分散」し、新しい担い手にバトンタッチできる仕組みに切り替えていく必要がある。

そのために、従来の世代や方法に限定せず、多様な層を巻き込み、世代や背景の違いを強みにするなど、新たなカタチを模索し、小さな関わりから始められるように支援する。

特に、子ども会育成会については、本来目的としている「子どもの主体的な活動を大人が支える」という重要な役割をどのように継承するか、近隣市町とも協力しながら進める。

ネットワークづくり

“友と共に暗闇の中を歩く方が
一人で光の中を歩くよりいい”

ヘレン・ケラーの言葉

めざす
市民の姿

多様な市民の知識・経験・技術が結びつき、補い合い、新たな発想や価値観を得ている。

そのため
矢板市は

学びのネットワーク形成を支援し、世代や分野を超えた交流の場づくりに努める。

「点」→「線」→「面」 学校・家庭・地域・企業・行政をゆるやかに結び直す

つながりの担い手が減少し、結果として一部の人が何役も担う偏りが生じている。そのため、ネットワークが固定化し、多様な価値観を受け入れるしなやかさが弱まっている。「生涯学習＝個人の学び」で完結するという理解が強く、学びを通じた地域のネットワーク形成という視点が弱いという現状と課題がある。

そのために、これからネットワークづくりは、「人をつなぐ」から「学びを媒介につなぐ」ことを意識し、世代や立場を越えて、学びを通じて「ゆるやかにつなぐ」仕組みづくりに努める。

まずは、関わる人が共感できる共通の目的を明確にした小さな協働から始める。子どもの学びの場を中心に、多様な主体とのつながりを結び直す「地域学校協働活動」を推進する。各学校と地域・企業等の橋渡しとなるつなぎ役（コーディネーター）を配置し、保護者の参画を後押しし、家庭の教育力の向上にもつなげる。図書館・公民館など「学びの拠点」との連携を強化し、各学校単位だけで閉じないよう、市全体をして仕組化を目指す。



主体的に学ぶことには、深い学びと生涯にわたる学習能力の獲得、現実社会や将来のキャリアに活かせる資質・能力の向上、そして、問題解決能力や自律性の育みといった多くの効果があるとされている。

学校教育はもとより、社会教育、家庭教育においても能動的に学び続ける市民を育成することは、各自の学びの質を高め、地域の発展につながる重要な要素であることから主として4つの施策を進める。

得意・好き・興味

“好奇心があれば、たくさんの面白いことを見つけられる”

ウォルト・ディズニーの言葉

めざす
市民の姿

得意を活かし、好きでつながり、成果を共有している。

そのため
矢板市は

関心や得意を活かせる学びの機会を広げ、自分らしい学びを見つけられるよう努める。

好きこそものの上手なれ

主体的な学びの出発点は、自分の「やってみたい」「知りたい」という気持ちであり、得意なことや好きなこと、興味のあることに取り組むことで、学びは自然に深まり、続ける力にもなる。上手にできるかどうかよりも「やってみよう」と思える意欲や工夫を重視する。そのために、市民の関心に合わせた体験型・選択型講座の充実を図るとともに、「得意」を活かして教え合う市民講師やボランティアを育成する。

また、子どもから大人までが参加できる多世代交流型の学びの場を創出したり、学びの成果を共有し合う発表・交流イベントを開催する。

自分ゴトに

“今やろうとしていることは、本当に自分のやりたいことだろうか？”

スティーブ・ジョブスの言葉

めざす
市民の姿

やらされるのではなく、自分で決めたことに夢中で取り組んでいる。

そのため
矢板市は

自分の生活や地域、人生に関係づけて考えることを支援する。

自分で考え、試す場をどうつくるか

講師の話をただ聞いて終わる、答えが用意されている講座や研修会では、自分の考えを持つ機会や意見を出す場が少ない場合が多い。テーマによっては、現実に結びつかず、成長や喜びを感じられないことがある。そこで、関心から選べる多様な学びの機会、体験を通して学びの場づくりに努め、感想や意見を共有する時間を大切にして、自分がやっていることが、自分や誰かの役に立つと感じられるよう支援する。小さな成功体験を積み重ね、試行錯誤から学びを深められるような場づくりに努める。

選べる余地

“選べるものがあることは幸せなのです”

手塚 治虫の言葉

めざす
市民の姿

自分で課題、目標を決め、学ぶ内容、方法、順序や期間等を選び、学んでいる。

そのために
矢板市は

年齢や立場に関わらず、多様な選択肢をもてる環境づくりを進める。

自分で選んだ「内容・方法・かかわり方・ペース・ゴール」に向けた学び

講座や研修等があらかじめ主催者側で決められている傾向があり、参加者は受け身で選択肢が限られている現状がある。結果として、「勧められたから」「義務だから」と参加するだけになってしまふ社会教育の課題がある。

しかし、「自分で選んだ」という感覚こそが、意欲と責任感を生み出すことから、本市は、講座や学習機会の多様化、柔軟な参加形態の導入、情報提供など「選べる余地」を増やすよう努める。まずは、興味に応じた探究課題や、読む・聞く・調べる・つくるなど、学び方を参加者が選べるよう進め方の改善に取り組む。

成果の実感

“小さいことを積み重ねるのが

とんでもないところへ行くただ一つの道だ”

イチローの言葉

めざす
市民の姿

学んだことを自分自身で評価するとともに、周囲と共有している。

そのために
矢板市は

成果を「見える化」・「共有」し、次の学びの原動力につなげる場づくりに努める。

成果の実感はゴールではなく、「次への原動力」

継続的に学ぶこと、難しい課題に取り組むことは、多くの市民にとって簡単なことではない。しかし、幼い子が積み木を積み上げたり、絵を描いたり、走ったりしたときにその成果を家族等に見てもらうことで、自身の達成感とともに、承認されたことが次への力となることがよく見られる。

そのため、小さなことであっても学んだことを振り返って自分の言葉にしたり、発表会・展示会・地域イベント等で学びの成果を披露したりして、自身で成長が実感できるような、または、他者に認めてもらえるような場づくりは大切であると考える。

講座や研修における自己の振り返りや相互評価などによる成果の実感を重視し、次の学びにつなげられるよう努める。

特に、文化祭、スポーツフェスティバル、生涯学習フェスティバルなど、普段様々な分野で活動している団体等、多様な主体が集まり、互いの成果を共有し合ったり、市民やボランティアに楽しさや魅力を感じられる場づくりに努める。そこから、「次への原動力」として主体的に学ぶ市民が更に増えるよう支援していく。

協働的な学びとは、他者を尊重しながら協力し、知識やスキルを共有して新しい解決策や理解を生み出す学び方であり、社会の変化に対応できる人材を育成するうえで重要な役割を担う。

従来、講師による講話等で、学習者が受け身で知識を習得することが多かったが、自らの問いや興味から生まれる学びを、他者とのかかわりを通して実現する対話的な学びへの転換が求められる。

対話の場

“対話を通じてこそ、
真理は人の心に根づく”

プラトンの言葉

めざす
市民の姿

自分の意見を伝え、相手の意見を聴き、振り返ることで学びを深めている。

そのために
矢板市は

「一方通行」の講義や講座、研修等から、「対話」重視の場づくりに努める。

インプットだけでなくアウトプットも行うことで、思考が深まる

対話の前には、考える材料が必要になるため、講師の話や映像、資料、体験などから適切なインプット（知る・感じる）を行い、考えを整理して自分の言葉でアウトプット（語る・書く・共有する）を行えるような場づくりに努める。

対話の醍醐味は、意見の違いにあるため、「自分と違う考えに出会うこと」が新たな視点の獲得につながる。対話で得た気付きを振り返り、次のインプットにつなげる学びのサイクルを循環させられるよう努める。

問い合わせの共有

“真の教育は、答えを与えることではなく、
問い合わせとともにすることから始まる”

パウロ・フレイレの言葉

めざす
市民の姿

自ら問い合わせをつくり、共有することで、自分ゴトとして学びを深めている。

そのために
矢板市は

問い合わせを与えるだけでなく、参加者とつくり、「協働的な探究」の場づくりに努める。

問い合わせを共有することで、多様な視点で学びを深める

講座や研修会等において、講師やファシリテーターが一方的に話したり、問い合わせする現状が多く見られる。しかし、市民がより主体的に学んだり、学びを深めたりするためには、参加者自身が問い合わせをつくり、参加者同士で問い合わせを共有する必要がある。

そのために、講座や研修会の目的を明らかにし、参加者自身の多様な問い合わせを尊重するとともに、問い合わせの見える化に努め、自分ゴトとして多様な視点で学べる場づくりに努める。話し合いを通じて「最初の問い合わせ」を見直したり、深めたりする場も時として設定する。

役割、得意を活かす

“嫌なことや不得意なことは一切やらずに、得意なことだけをやるようにしていた”

本田宗一郎の言葉

めざす
市民の姿

互いの違いを「弱点」ではなく、「強み」としてそれぞれの役割を果たしている。

そのため
矢板市は

役割を見える化、自己選択できるようにして、得意を活かせる場づくりに努める。

みんなが同じことを一斉にやる必要はない

「協働的な学び」は、一緒にやることそのものが目的ではなく、それぞれの役割や得意を活かすことで生まれる相乗効果がカギとなる。そこで、それぞれの好きや得意に合った役割をもつことで自然と力を発揮できるように、参加者が企画・運営・記録・広報などの役割を分担できる講座等の設計に努める。

また、違いを「弱点」ではなく、「強み」として活かすなど、多様性を価値に変える視点をもち、得意を活かしたことがチーム全体に貢献したと実感できるよう努める。

一方で、多様な役割を循環させるなどして、一人ではできないことが実現できることを共有していく。

プロセスを重視

“希望を持つつ旅をするのは
そこに行きつくことよりも楽しい”

ロバート・ルイス・スティーブンソンの言葉

めざす
市民の姿

失敗も「学びの一部」としてとらえることができ、前向きに学び続けている。

そのため
矢板市は

多様な意見や考えの尊重に努め、だれもが失敗を恐れずに挑戦できる雰囲気をつくる。

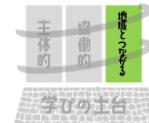
「失敗も学びの一部」一人一人の「学びの変化」を認める

現代社会では、「合理性」「効率」「成果」が重視される傾向にある。限られた時間で成果を出すことが求められ、無駄を省くことが正しさのように語られることが多い。

しかし、人の学びや成長は、必ずしも一直線ではなく、試してみて、失敗して、話し合って、考え方を直すといった、一見回り道のようなプロセスの中にこそ、本当の理解や課題解決につながる。

プロセスを重視した協働的な学びを促進し、効率だけでは得られない「他者の視点」「共感」「発想の転換」を重視する。たとえ結論が出なくとも、意見交換の過程自体に意味があることを共有する場づくりを地道に続けていくことで、失敗や迷いを恐れずに挑戦する文化を根付かせることにつながると考える。

また、講座や研修の中に「失敗も学びの一部」と価値付け、小さな変化を拾い上げ、途中でやり直すこと、考え方をポジティブに捉えられる人づくりに努める。



生涯学習で得た知識や経験を地域活動に活かすことは、個人だけでなく地域全体の活性化につながる。新たな学びや人とのつながりが生まれ、子どもにとって、学校教育だけでは得られない実体験を通して、視野が広がり、地域社会への関心が高まる効果が期待される。子どもや若者に伝える機会が増えることで、地域の大人の教育力の向上が期待され、持続可能な地域社会の構築につながる。

地域を学びのフィールドに

めざす
市民の姿

地域で学び、地域を学び、地域と学ぶことで、地域とのつながりを感じている。

そのため
矢板市は

地域を学びの場・題材として扱うとともに、人と人のつながりづくりに努める。

学びが日常とつながり、学びが自分ごとになり、つながりが生まれる

地域の人材や資源は、貴重な「学びの資源」であり、これらを見る化して、市民の学びの幅が広がるように努める。また、地域を知り、市民のこれまでの学びを地域の中で活かしたり、地域が学びを育てたりする循環をつくることは、今後より一層重要なことから、コーディネート機能の整備を進め、郷土愛の醸成につなげる。

地域での体験的な活動は、学びの成果が大きい反面、実施について安全面等に十分に留意して実施する。

地域そのものを学びの舞台に



地域「で」学ぶ(場の利用)

- ・地域の場所・資源(公民館・公園・事業所・史跡など)を学習の場にする。
- ・まず「やってみる」
- ・社会性や人間性を育み、地域とのつながりを感じられるようにする。

地域「を」学ぶ(対象の学習)



- ・地域の歴史・産業・課題・自然や文化を学ぶ。
- ・地域を調べて「理解する」
- ・地域への愛着や所属意識を高められるようにする。
- ・文化や伝統を継承し、アイデンティティを形成する。

地域「と」学ぶ(共創・協働)

矢板武夫妻の像(矢板武記念館所蔵)

- ・地域の人(住民、事業者、NPO等)と一緒に学び合い、解決策を模索する。
- ・地域の人と「一緒に考える」
- ・教える・学ぶの関係を超えた「共に学ぶ」関係を構築する。
- ・交流と共感で多世代・多主体のつながりを広げる。



多世代交流

めざす
市民の姿

同世代だけでなく、他世代とのかかわりから、気付きや学びを得ている。

そのために
矢板市は

世代の違いを超えて学び合えるテーマや場づくりに努め、多世代交流を促進する。

単一世代では気づけない学び

多世代交流を行うことで、顔見知りの関係が増え、日常生活の安心や支え合いにつながる。「地域で育つ」「地域で生きる」という実感を持ちやすくなり、地域が活性化していく。しかし、これを意図的につくることは難しい点が多いため、工夫し、実践していく。

難しさ

1 関心・ニーズの違い

- ・世代ごとに「楽しみたいこと」や「学びたいこと」が違う。
- ・地域側は「人手がほしい」「後継者を育てたい」が、学ぶ側は「体験したい」「学びたい」と目的が異なることがある。

2 立場・力関係の偏り

- ・高齢者が教える側、子どもが教わる側に固定されやすい。

3 時間・生活リズムの違い

- ・学校、仕事、余暇のタイミングが合いにくい。

4 値値観のギャップ

- ・今と昔の常識の違いが衝突を生むことがある。

5 成果が見えにくい

- ・「関係性の変化」など、目に見えない成果が中心になりがちである。



乗り越える工夫

1 共通テーマの設定

- ・防災、環境、地域文化など、誰にとっても意味のあるテーマを選ぶ。

2 役割分担で互いに活かし合う

- ・それぞれの世代の得意を持ち寄る。
子ども=発想、大人=実行、高齢者=知恵など

3 小さな活動から積み重ねる

- ・いきなり大きな事業をするのではなく、まずは、対話やワークショップから始める。

4 コーディネーターの配置

- ・世代間を橋渡しする人材がいることで活動が続きやすい。

5 成果を共有・発信する

- ・発表会や展示で「学び」を地域に「見える形」で還元するようにする。

学びは、人と人をつなぐ架け橋である。世代や立場を超えて共に学ぶことで、互いを理解し、支え合う関係が生まれる。

ここでは、本市が取り組んでいる「学びで人を集めることで新たなつながりを育んでいる具体的な例をいくつか紹介する。学びの土台を固めながら、主体的、協働的に学び、地域がつながるようにするために、6期計画の大切なポイントが複数重なっている事例を選んだ。



学びに人が集まる好循環

学びの場に人が集まることで、以下のような好循環が生まれることが期待される。

- 1 学びが楽しいと感じる人が増える。
- 2 新しい知識やスキルを次々と身に付けていく。
- 3 常に学び続け、成長し続ける。
- 4 楽しそうな様子に惹かれて、更に人が集まつくる。
- 5 人が集まることでコミュニティが更に活発になる。

事例紹介 1

親子で川の生きものさがし体験教室



親子で川の生きものさがし体験教室（2025年7月開催）

小学生とその保護者を対象に、水土里ネットとちぎから招いた講師をはじめ、地域のシニアボランティア、生物を専攻する高校生、市の生活環境課の職員などが協力し、普段はなかなか交わることがない多世代が交流する貴重な機会となった。

市役所近くの川を舞台にして、参加者は、地域の高校生やボランティアとともに、魚やカニなどの生きものを夢中になって捕まえた。

講師やボランティアから捕まえ方のコツや生きものの名前を教わったり、高校生とスマートフォンのアプリで調べたりしながら、子どもだけでなく保護者も楽しみながら学んでいた。

会場には笑顔や会話があふれ、身近な場所に多くの生きものが生息していることへの驚きや捕まえた喜びをともに感じる場となった。

今回参加した高校生たちは、探究活動に取り組んでおり、夏休みを活用して事前に地域でフィールドワークを行った上で、この体験教室に臨んだ。栃木県農地水多面的機能保全推進協議会の協力のもと、地元農家とのふれあいを通して、学校では得られない学びを深めた経験を活かして、当日は「生きものの捕まえ方」や「水質と生息生物の関係」について、成果発表を兼ねたミニ講座を行い、親子やシニア世代に向けてわかりやすく説明するという協働活動につながった。



「この川の水はきれいと言えるのか？」という問い合わせを参加者と共有し、捕まえた生きものを手がかりに、参加者全員で考える対話型の学びの時間が設けられた。

小学生にも伝わる言葉で進行した高校生の講座は、世代を超えてともに学びを深める貴重な機会となった。

地域をフィールドにして、身近な自然について体験的に学び、地域の小学生とその保護者、高校生、地元住民、専門性の高い講師、シニア世代が対話的にゆるやかなつながりをつくれたこうした事例を増やせるよう努める。



矢板市文化スポーツ複合施設（2024年4月開設）

にぎわいとふれあいの文化・スポーツの複合拠点として2024年開業以来、まちなか交流・健康づくり、地域防災の拠点として多くの人が集う場所になっている。

文化祭やスポーツフェスティバルをはじめ、生涯学習フェスティバル、二十歳のつどいなどのイベントで多様な市民の交流の場となっている。

各種講座や説明会、会議等でも利用されるほか、トレーニングエリアでは、本格的なウェイトトレーニングなど各種ワークアウトでの利用者も増えている。ブラインドランナーが安心して走ることができるランニングコースも配備しており、インクルーシブ社会の実現に向けた環境整備に努めている。

AIカメラ等の未来技術も導入され、地元住民の定期的な健康づくりや文化的活動での日常的な利用も見られている。

さらに、城の湯温泉と連携して、スポーツ合宿を誘致するなど県内外からの利用者が増加し、関係人口の増加につながっている。

利用者の様々な声に耳を傾けながら運用している。こうした施設をより有効に活用し、生涯学習の推進に努めていく。





矢板市生涯学習フェスティバル（2024年10月開催）

2024年、大学3年生を実行委員長、中学3年生を副委員長に、中高生を中心とした実行委員会を組織し、**多世代交流**を目的とした機会創出のためのイベントを初開催した。

企画・運営に若者が関わり、30～40代の地域活動を実践者が**対話的**にサポートするというこれまでとは違う**プロセスを重視**した新しい形で進めた。

誰にも知られていないイベントの周知に、**Instagram**が有効であった。

体験・表現を重視し、生涯学習の「学び」や「つながる」ことの**楽しさ**をどの世代にも味わってもらえるように、タイトルには、あえて「生涯学習」という言葉を残した。

地域活動団体、スポーツ団体、学校、企業、シニア世代など、**多様なブース**運営者が体験メニューを展開した。また、本市出身、または本市にゆかりのある各分野で活躍するダンサー、ピアニスト、伝統文化を継承する小学生などのステージ発表に多くの市民が拍手を送った。

中高生が、普段学校で学んでいる研究発表を市民に向けて発表する場も設け、大学教授などの講評をもらう機会もできた。

100人を超える中高生ボランティアが、会場準備から当日の運営、片付けなど**主体的**に活躍できるよう新たな**地域活動の場**としての役割も果たした。

最後に、会場みんなで輪をつくり、息を合わせて太鼓をたたく「ドラムサークル」でイベントを締めくくった。小学生から80代の参加者まで、**世代を超えて**太鼓を一緒に演奏することを通して、**一体感**を味わうことができた。こうした機会を小さくても少しづつ増やせるよう努める。



文化財を核としたコミュニティづくり

文化財の多くは指定や登録を受け、本市でも保存管理に努めている。一方で、「地域の人がどのようにかかわるか」「若い世代がどう受け継ぐか」といった視点は課題の一つである。結果として、「文化財=触れてはいけないもの」と思われてしまいがちであるという現状がある。

しかし、文化財を行政や保存会などの専門家だけが守るのではなく、市民がみんなで活かしている事例もある。文化財を「残す」から「残して活かす」取組である。

本市の泉地区には、明治時代に大規模な農場が開発された歴史があり、現在も第一農場、第二農場という行政区名にその名残がある。山縣有朋の別邸が小田原の古稀庵から移築され、今は記念館として公開されている。地元市民が集まり、主体的に周辺の環境を整えるなどの地域活動が行われており、数年前からは、秋にはコスモスが一面に咲き誇るようになった。

地元市民や団体が子ども向けのブースを多数用意して、定期的にイベントを開催している。そこに集まる多様な主体の交流が生まれ、新たなコミュニティの形成につながっている。

市民みんなで活かしていくことで、「地域文化の継承者」を育てることにもつながることが期待される。文化財を活かした交流スペースやガイド拠点を設け、保存だけでなく地域コミュニティのハブとして位置付けていく。

今後は、こうした「やりがい」や「楽しさ」を感じながら市民が更に主体的に活動できるように、学校教育、生涯学習、地域活動を横断して、「文化財×学び×交流」をテーマに、「過去の遺産」を「未来の創造の種」にできるよう努める。





けん玉をつかったプロモーション活動

2024年、矢板市生涯学習フェスティバルの初開催にあたって、Instagramを用いた広報周知を行った。

その中で、昔あそび体験ブースで使うけん玉にイベント名を刻印したもので動画を作成することとなった。小学生から80代のシニア世代まで、多くの方に挑戦していただき、次第に多くの方に見ていただくようになった。本番までに約200人のさわやかな笑顔でけん玉に挑戦する様子を伝えた。

本番までの約30日間で約10万人の閲覧者があった。

二十歳のつどいの開催に向けて、「できるだけ多くの市民が二十歳の若者を祝えるように」という課題解決のために、「祝」と書いたけん玉で、多世代の市民に二十歳を祝う動画作成に協力していただいた。

二十歳のつどい本番前には、多世代のけん玉チャレンジ動画に加えて、恩師、消防署や商工会、自主サークル団体、放課後子供教室等からお祝いのメッセージ動画も投稿し、二十歳の若者を祝った。

二十歳のつどい当日は、二十歳の若者にもけん玉に挑戦してもらい、さわやかな笑顔がたくさん見られた。

「けん玉」というあまりなじみのないことに、ちょっと勇気を出して挑戦すること、うまくいかなくても何度か試してみること、できる楽しさや喜びを味わえることは、「生涯学習」の本質的な要素でもあった。

「けん玉」という一つのことを通して、自分には関係ないと思っていたイベントも少し身近に感じたり、多様な参加者の一員として、みんなでつくりあげる雰囲気を味わったりできることから、けん玉をつかったプロモーション活動を継続していく。





主体的、協働的に学び、市民生活がより豊かになるよう、生涯学習を推進していく上で、市民が適切な情報をつかみ取る力につけることは重要である。

AIなど情報通信環境の発達したことにより、「読書ばなれ」が課題となっている。本市においても読書の習慣がないという市民の割合は高い。

しかしながら、読書活動は、情報収集の重要なツールの一つであることに変わりないことから、特に普段本を手に取ることがない市民が、まずは手に取るところに重点を置き、読書活動に取り組める新たな施策を展開する。

思わず手にとってしまうしきけをつくる

めざす
市民の姿

すべての市民が、あらゆる機会と場所において主体的に読書に親しんでいる。

そのため
矢板市は

普段本を手に取ることがない市民に、楽しみながら本を手に取るきっかけを増やす。

見つけたら、めくってみよう

図書館や書店に立ち寄らない人が増える中、誰もがふとした瞬間に本と出会えるよう、まちの中に小さな読書スポットをつくる取組を行う。

事業者やお店等の協力を得て、立ち寄った人が気軽に本を手にする場を市民とともに創出する。読書スポットには、1冊から数冊程度と数を絞って定期的に選書し、交換することで、少しでも市民の得意・好き・興味を引くものを置くことができれば、より多くの市民が本を手に取る機会が増えると考える。

まずは、読書活動への造詣の深い方の知恵も借りながら、小さく始めて、気軽にページをめくることができる図書館や書店とは異なる場所を少しずつ増やしていくよう努める。読書スポットを地図上で確認できるようにして、地域全体で取り組んでいく。

副次的な図書館の利用を促す

めざす
市民の姿

すべての市民が、何らかの形で図書館を利用し、本に親しんでいる。

そのため
矢板市は

読書活動のみを目的とせず、図書館を副次的に利用できる場づくりに努める。

まちかどの読書スポットやSNS、多様な図書館イベントで惹きつける

市立図書館には、定期的に本を借りる利用者や学習室を利用する利用者がおり、固定化している傾向がある。より多くの市民にとって図書館を自宅や職場（学校）ではないサードプレイスとして、憩いの場、交流と創造を楽しむ文化の拠点となるよう努める。

まちかどの読書スポットで興味をもった市民が気軽に利用できるような仕組みづくりや、SNSを活用した「おすすめの本の紹介」を新たな形で発信することで、わくわくしながら訪れる市民の図書館の利用を促す。



読書活動推進の取組

方針	推進方策	施 策
地域・学校・家庭における読書活動の推進	地域 <ul style="list-style-type: none"> 市内各所で本に触れる機会の創出 市立図書館における取組の充実 こども未来館・児童館における読書に親しむ活動の充実 読書ボランティア等の活動支援 	<ul style="list-style-type: none"> 「まちかどブック（仮称）」制度の整備及び協力事業所の発掘 親子で体験できる講座等の図書館イベントの開催（英語絵本読み聞かせ、日本の民話、工作等） 図書館司書体験 市民によるポップアップ作り 偶発的な本との出会いや交流と対話の促進 児童館、学童保育館、放課後子ども教室、こども未来館への本の配達 おはなしポットの会、図書館友の会、かたりべの会等への活動支援
	学校等 <ul style="list-style-type: none"> 学校での読書活動推進への支援 学校図書館の整備・充実 市立図書館との連携推進 	<ul style="list-style-type: none"> 学校図書館の環境整備 児童生徒による主体的な委員会活動等の充実 図書館スタッフによる学校図書館の訪問 「だいしんパック」事業 調べ学習や授業で必要な図書の貸し出し 小中学生による地域活動の支援（成果発表の場づくり）
	家庭 <ul style="list-style-type: none"> 保護者に対する学習機会の充実 	<ul style="list-style-type: none"> セカンドブック事業 「えほんのひろば＆赤ちゃんの時間」開催
読書バリアフリーの推進	<ul style="list-style-type: none"> 障がい者が利用しやすい図書館サービスの充実 障がい者が利用しやすい設備の整備 矢板市電子図書館の利用促進 	<ul style="list-style-type: none"> マルチメディアディジタル図書（音声、文字、画像を同時に再生できるデジタル図書）「わいわい文庫」の貸し出し 点字、オーディオブック、大活字本等の整備 スロープなど、バリアフリー 「ともなりライブラリー」と市電子図書館との連携
啓発・広報	<ul style="list-style-type: none"> 読書に関するイベント等の情報発信 本を手に取らない人が本にふれる機会の創出 	<ul style="list-style-type: none"> 「としょかん便」の発行（年4回） Instagram等による情報発信 映画観賞会、音楽会、矢板図書館寄席、星空観察会等 「まちかどブック（仮称）」制度の整備及び連携



1 矢板市生涯学習推進本部設置要綱

(設置)

第1条 生涯学習の総合的かつ効果的な推進とその普及を図るため、矢板市生涯学習推進本部（以下「本部」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 本部は、次に掲げる事務を所掌する。

- (1) 生涯学習に関する諸施策の総合的な企画及び推進に関する事務。
- (2) 生涯学習にかかる調査研究に関する事務。
- (3) 生涯学習の普及奨励に関する事務。
- (4) その他生涯学習の推進に必要な事項に関する事務。

(組織)

第3条 本部は、本部長、副本部長及び委員をもって構成する。

- 2 本部長は、市長をもって充てる。
- 3 副本部長は、副市長及び教育長をもって充てる。
- 4 委員は、矢板市庁議等規則（平成2年矢板市規則第2号。以下「庁議等規則」という。）第3条に規定する幹事課長等をもって充てる。

(会議)

第4条 本部会議は、本部長が主宰する。

- 2 本部長が主宰することができないときには、本部長が副本部長のうちからあらかじめ指名する者に、その職務を代行させる。
- 3 本部長は、必要に応じ、委員以外の者の出席を求めることができる。

(幹事会)

第5条 本部会議に提出する原案の作成及び本部の決定した施策の推進に関し、必要な事項を処理するため、本部に矢板市生涯学習推進幹事会（以下「幹事会」という。）を置く。

- 2 幹事会は、幹事長、副幹事長及び幹事をもって構成する。
- 3 幹事長は、生進学習課長をもって充て、幹事会を主宰する。
- 4 副幹事長は、生進学習課長及び担当グループリーダーをもって充て、幹事長事故あるときは、その職務を代行する。
- 5 幹事は、庁議等規則第14条に規定する総合政策課長及び総合政策課長が指名する課長等（生進学習課長を除く。）をもって充てる。
- 6 幹事長は、必要に応じ、幹事以外の者の出席を求めることができる。

(専門部会)

第6条 幹事会に付議すべき事項の調査研究及び必要な連絡調整を行うため、専門部会を置く。

- 2 専門部会は、生涯学習課長主宰のもと、幹事の指名する職員をもって構成する。
- 3 生涯学習課長は、必要があると認めるときは、専門部会に分科会を設け、分科会を開催することができる。
- 4 生涯学習課長は、必要に応じ、専門部会の会議に部会以外の者の出席を求めることができる。

(推進協議会)

第7条 生涯学習に関する施策について、広く市民の意見を反映させるため、矢板市生涯学習推進協議会を設置することができる。

(事務局)

第8条 本部、幹事会及び専門部会に関する庶務は、生涯学習課において処理する。

(委任)

第9条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、本部長が別に定める。

附則

この要綱は、平成29年4月1日から施行する。

2 矢板市生涯学習推進計画策定委員会設置要綱

(設置)

第1条 生涯学習の総合的かつ効果的な推進と普及の円滑な実施を図る矢板市生涯学習推進計画5期計画（以下「6期計画」という。）の策定にあたり、基本となるべき事項について意見を求めるため、矢板市生涯学習推進計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、その目的を達成するため、5期計画全般について審議し、その原案を作成する。

(組織)

第3条 委員会は、委員30人以内で組織する。

2 委員は別表1及び別表2の者とし、別表1の委員については、公募及び関係団体のうちから、別表2の委員については、所属長の推薦に基づき市長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は、令和8年3月31日までとする。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長1人を置く。

2 委員長及び副委員長は、別表1の委員のうちから互選により定める。

3 委員長は、委員会の会務を総理し、委員会を代表する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が必要に応じて招集し、委員長が議長となる。

2 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

3 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

(点務)

第7条 委員会の庶務は、生涯学習課において処理する。

(委任)

第8条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附則

この要綱は、令和7年4月1日から施行する。

資料

3 矢板市生涯学習推進計画策定委員名簿

別表1

【敬称略】

	区分	氏名	備考
1	学校関係者	増渕 直嗣	矢板市小中学校校長会
2	女性団体関係者	中嶋 加代子	矢板市女性団体連絡協議会
3	青少年団体関係者	森本 忠	矢板市子ども会連合会
4	高齢者団体関係者	成瀬 常明	創年大学ぶらぶらクラブ
5	自治公民館関係者	塚原 博実	矢板市自治公民館連絡協議会
6	文化団体関係者	大類 正雄	矢板市文化協会
7	体育団体関係者	森島 幸男	矢板市スポーツ協会
8	幼稚園・保育所関係者	岡本 純世	矢板市市立幼稚園連絡協議会
9	ボランティア団体関係者	塚田 翠	矢板市ボランティア連絡会
10	地域活動実践者	四十万 直人	矢板市生涯学習フェスティバル実行委員会
11	図書館関係者	高瀬 千恵子	矢板市立図書館

別表2

	区分	氏名	職名
1	総合政策課	兼崎 弘章	主査
2	秘書広報課	小野 陽子	副主幹
3	総務課	斎藤 隆洋	主査
4	社会福祉課	松岡 雄一	課長補佐
5	幸齢課	和氣 侑生	主事
6	子ども課	弦巻 賢介	主査
7	健康増進課	金澤 雅子	副主幹
8	教育総務課	高橋 義幸	副主幹兼管理主事兼指導主事
9	矢板公民館	斎藤 真由美	館長

令和8年3月

編集・発行 矢板市生涯学習推進本部
事務局 矢板市教育委員会教育部生涯学習課
〒329-2165 栃木県矢板市矢板106番地2
TEL 0287-43-6218
FAX 0287-43-4436
E-mail syougaigakusyuka@city.yaita.tochigi.jp
市HP <http://www.city.yaita.Tochigi.jp>

